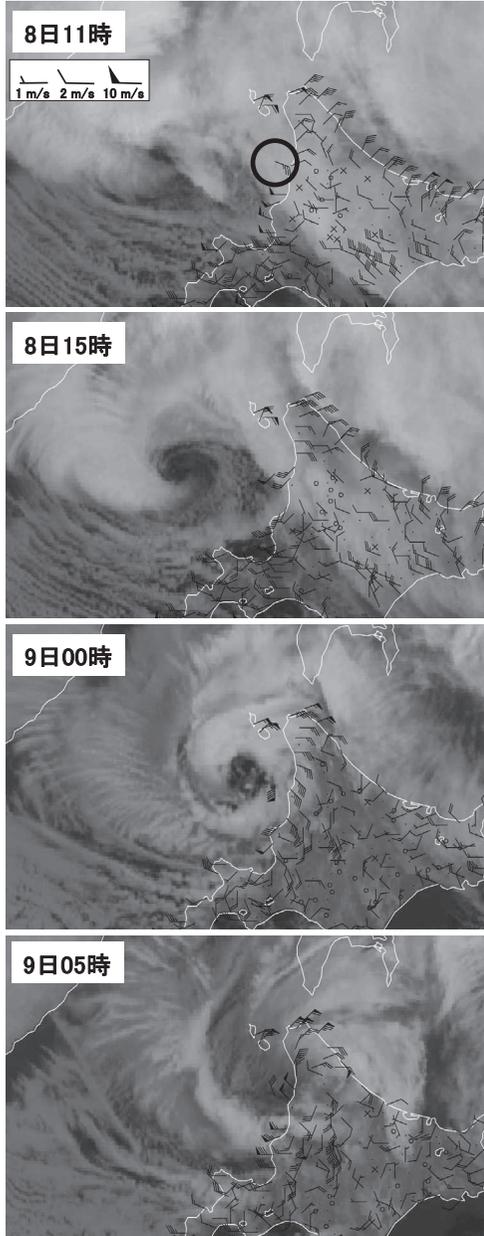




今月のひまわり画像—2021年1月

北海道に上陸したポーラーロウ



第1図 2021年1月8日11時、15時、9日00時、05時（日本時間）の北海道付近における赤外画像（○印の中心は羽幌町焼尻を示す）及びアメダスの風。

2021年1月7日から8日にかけて、低気圧が急速に発達しながら日本海から千島近海へ進み、その後、11日にかけて強い冬型の気圧配置が続いた。その一方で、8日中には、北海道の西海上では、ポーラーロウと呼ばれる低気圧が発生した。ポーラーロウは、急速に発達して東進し、9日明け方には北海道に上陸して衰弱した。最盛期のポーラーロウの中心に近い、北海道羽幌町焼尻では、同日01時30分頃（日本時間）に、最大風速21.8m/s、最大瞬間風速29.9m/sの非常に強い風を観測した。

第1図は、8日11時、15時、9日00時、9日05時の赤外画像である。ポーラーロウの低気圧性循環は、8日11時頃から日本海の北海道の西海上で確認でき、その後は急速に循環が強まって15時頃には、明瞭な渦となった。この渦は、9日00時頃には、眼を伴った台風に似た形となり、05時頃には、北海道に上陸して、衛星画像では渦は不明瞭となった。

ポーラーロウは、ほとんどすべて冬季の海上で発生するため、通常の高層気象観測網では捕捉が困難で、気象衛星の雲画像が利用できるようになってから、その存在が確認されるようになった。北太平洋なら北緯50度付近、北大西洋では北緯60度付近で多く発生し、日本付近では日本海北部の北海道の西海上や、日本海西部の日本海寒帯気団収束帯（JPCZ）上でよく見られる。多くのポーラーロウは、対流性の雲を伴い、らせん状やコマ状、あるいは眼を伴った台風に似た形をとる。傾圧性が弱いときにはらせん状や台風に似た形に、強いときにはコマ状に発達する傾向があると言われている。通常の温帯低気圧や台風と比べてスケールは小さく、寒気内小低気圧と呼ばれることもあるが、海上で急速に発達して20m/s以上の非常に強い風や大雪を伴うことがあり、防災上でも十分に注意が必要である。

ポーラーロウは、特に船舶にとっては風向の急激な変化を伴うため、海難事故につながるおそれのある危険な低気圧となっている。また、急速に発達するため、気象台の現場では一時も目を離さない監視が必要な現象となっている。

（気象庁大気海洋部予報課 西 峰雄）